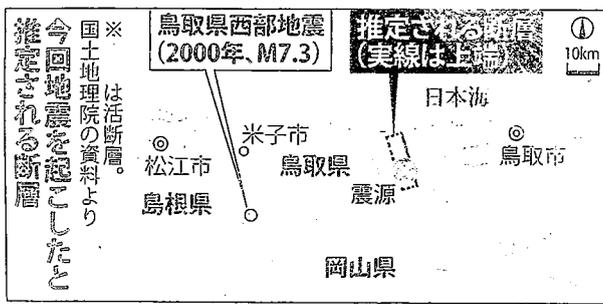


鳥取震源は隠れ断層

国土地理院 18×13キロ、地下500メートルに



鳥取県中部で21日に震度6弱を観測したマグニチュード(M)6.6の地震で、国土地理院(茨城県つくば市)は22日、地震を起こした断層の推定結果を公表した。断層は北北西―南南東に延びる長さ約18キロ、幅約13キロの大きさで、最も浅い所(上端)が地下約500メートルにとどまり、地表に現れない未知の「隠れ断層」とみられる。(29面に関連記事)

地震による地面の動きの観測データなどから推定した。断層は西側に70度以上

の急角度で傾斜し、断層の西側の地盤が南へ、東側が北へずれ動く「左横ずれ」だったと考えられるという。断層全体が一様に動いたとした場合、ずれは約30センチだと推定している。

その後の余震もほぼこの断層に沿って起きていたが、断層は余震の震源域よりやや北側に長くなっているという。同院の矢来博司・地殻変動研究室長は「角度が急な点や左横ずれという点で鳥取県西部地震(2000年、M7.3)と似ている。長さの推定はまだ暫定的で、もう少し短い可能性もある」と話している。

なるとも、被害を及ぼす地震が起る可能性は全国どこでもある」と注意を呼びかけた。

【飯田和樹】